

あなたがたに平和があるように

ヨハネによる福音 20:19-31

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがた

が、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

説教

わたしたちが読んでいる聖書ではヨハネ福音書は 21 章までありますが、これは後で書き加えられた（と聖書学では）考えられています。きょうの朗読がオリジナルのヨハネ福音書の結末だったようです。ここにはいろいろな教えが盛り込まれて（「あなたがたを遣わす」「あなたがたが赦せば、その罪は赦される」「見ないのに信じる人は、幸い」などのキーワード）いるのですが、きょうは「あなたがたに平和があるように」をとりあげます。復活のイエスの第一声がこれでした。復活の日曜日に二回、その翌週の日曜日にも一回、合計三回です。平和とも平安とも訳されることことばにどんな意味があるのでしょうか。平和とは欠けたもののない状態を意味する。（聖書と典礼の脚注）ひねくって考え、平和とは戦争のない状態だという人もいるかもしれません。わたしもいろいろ考えてみたのですが、復活のイエスが言う「平和」とはそもそもの根っこ、人間の根底、掘って掘って掘り下げていったところで突き当たる堅い岩盤のようなものではないか、と考えています。動かしようのないもの、すべての基準になるもの、そんなイメージです。

二匹の犬が仲良くしている、そんなところに一枚の皿（エサがのっている）がでてくると皿をめぐる争いが起こります。そして力の強いほうがその皿を勝ち取ります。次回から負け犬のほうは争いをしかけることなく皿を譲るようになります。

あなたが晩御飯のしたくをしているとします。料理ができあがり、盛り付けもおわり食卓に皿をはこぶとき、盛り付けの多いもの、盛り付けの出来映えのいい皿を誰に提供するか？ たいてい、自分を後回しにして良いものを子供

なり、その時にお客さんがいれば客にだすのではないのでしょうか。

でも、これはふつうの時のはなしであって、犬だってハラをすかせて飢えている時だったら命がけで戦うんじゃないか？料理をつくる人はこっそり一番おいしいところを隠して、あとでこっそり食べるんじゃないか？なんてことも考えられます。

「平和とは欠けたもののない状態を意味する」なかなか妙味のある解釈だと思います。でも、この解釈では欠けたもののない状態などあり得ないだろうという批判に十分に答えることができません。世界は偏っています、けっして均一・平等ではなく欠けた状態はいたるところにあります。また逆に十分な状態、ありあまっている状況もあるのです。つまり目に見える世界は不公平にできあがっています。

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。5:9

その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。10:12-13

わたしが来たのは地上に平和をもたすためだ、と思っはならない。平和ではなく、剣をもたすために来たのだ。10:34

マタイ福音書から「平和」が記されている箇所を書き抜いてみました。一筋縄ではいかない複雑な意味合いが「平和」には含まれているようです。あたままで理解しようとする各々の文言の矛盾点ばかりに気がいってしまいます。

福音では「あなたがたに平和があるように」と復活の主は第一声で発せられます。そして信じる者になりなさい、といわれます。

平和、平安を自分のところの中に求めることも必要ですし、大事なことだとおもいます。できる人はそれでいいでしょうが、そうはできない、難しいということだって大いにあり得ます。だいたい世界は偏っていて幸福な人ばかりいるわけではありません。だから、わたしには主の平和がないから、わた

しは不信仰なんだ、なんてけっして思いつめないでください。

念仏の効用って言い方があるのかどうか知りませんが、頭で考えてもわからないことは考えるだけ無駄かもしれません。司祭が礼拝の最期に「行きましょう、主の平和のうちに」と呼びかけ、会衆が「主の平和がありますように」と応答する、これを礼拝ごとに繰り返していると平和が訪れる、と信じているからこそ主日の礼拝は世界中でおこなわれているのです。
